

被災地の看護師・介護士たち

全国訪問看護事業協会事務局長／健和会・看護介護政策研究所所長 宮崎 和加子

『マツケンサンバ』の齊藤さん

2010年10月末、宮城県の松島で『東北・北海道ブロック訪問看護ステーションの集い』が開催された。各県の協議会の役員が集まり、夜の懇親会では各県で競うように出し物を演じて大笑いの会だった。私はたまたま講師だったのでご一緒させていただいた。

岩手の出し物は、『マツケンサンバ』。そのお殿様役（キンキラの衣装で）が、当時の会長の齊藤裕基さんだった。今回の大震災で訪問看護ステーションとして最も大きな被害を受けたのが、その齊藤さんの法人だと思う。

3カ所すべて流された

地震直後に齊藤さんのことが心配で電話したがなかなか通じなく

て、3〜4日後にやっと通じたのが、当時の副会長の高橋栄子さん（訪問看護ステーションゆとりが丘所長＝岩手県滝沢村）だった。

「私のところはほとんど被害がないんだけど、齊藤さんのステーションが3カ所全部津波に流されちゃったんです。やっと連絡がついたんだけど、声は元気でした。次の日曜日に海岸線沿いのステーションに行つてこようと思つています。宮崎さん、報告しますよ」

会社を立ち上げ社長として

齊藤さんは現在50歳。2005年に株式会社を立ち上げ、まず釜石にあゆみ訪問看護ステーションを開設した。その後、山田町と陸前高田にも開設し、3カ所の訪問看護ステーションを運営。

ところが、今回の地震と津波で3カ所全部を津波に流され、事務所を失つてしまった。

「齊藤さん、大丈夫？ どうするの？」

「元気ですよ。今は釜石市のさまだまなことをボランティアで手伝っていますよ。ステーションはそのうちに再開しますよ」

「どうやって、再開するの？ お金はあるの？」

「お金はないけど、銀行が貸してくるって言ってくれたんで、何とかなるでしょう」

「そうなの？ 大丈夫……」
悲壮感を感じさせず、何とおおらかなことか。

大震災の日

私が齊藤さんのところを訪問し

たのは、4月19日。久しぶりの再開にハグハグしながら「生きていてよかったー」というと、「僕はほとんど死んでいたはずなんです」と様子を話してくれた。

その日は、陸前高田の訪問看護ステーションで仕事をしていた。午前中に利用者宅を訪問の予定だったが、訪問時間の変更依頼があり、午後になった。それで14時46分には高台にあるその利用者さん宅にいた。だから命が助かった。変更がなければたぶん事務所にいた。事務所は海辺で全部流され跡形もなくなったので、自分も流されていただろう。

「その後、どうしたの？」

「職員の安否を確認しようとしたけど通じない。何が起きているのがわからなかった。そして高台から陸前高田の町をみて啞然としてしまった……。なんなんだこれは……。どのくらいの時間がたったかわからなかったが呆然とただ見ていたんだと思う。ふと気がついたら、近くにいた若い女性が『仕方ないわね』といった。その言葉で我に返って、真っ暗な中



中央が齊藤さん。再開したステーションの前で



50日ぶりに見つかったカルテ類



長靴を履いて訪問

を車で4時間かかって家に戻ったんです」

事務所を再開した

前述の高橋さんから時々電話で教えてもらった。

「齊藤さんね、自分のステーションのことを後回しにしてボランティアをやっているんですよ」「齊藤さんが釜石で新しい事務所を見つけて事業を再開したそうです。山田町でも何とか再開できそうですって」

その後、山田町に1カ所しかないその訪問看護ステーションにうかがった時は、道の駅の敷地内の魚の集積所だったところを借りて事務所を立ち上げて、荷物を運び込んでいる最中だった。

そこへ、所長（管理者）さんが訪問看護から帰ってきた。その姿は長靴姿。「まだ、水が引かず、ぬかるむところもあるんです。でもボツボツでも再開しなければね。何とかありますよ」。頼もしいなあとつくづく思った。

陸前高田のステーションは、少し様子を見てから再開しようと思っていたが、職員みんなが、早く事務所を探して再開しようと集まってくれているので、こちらも再開するという。

奇跡的にカルテが見つかった！

「宮崎さん、実はきょうすごいことがあったんですよ」と、自動車で被災後の山田町を詳しく案内してくれた齊藤さんが、車を止めたのが、瓦礫の山の向こうに、一軒家の屋根だけが見えるところ。

「宮崎さん、あれが、僕のステーションの屋根なんですよ。2階建ての一軒家の事務所があった場所は、そこから200m離れたところ。元の場所には何もなくなっていたのであきらめていたんですよ」

が、きょう連絡がきたんです。うちの事務所の2階部分らしいものが離れた場所で見つかった。それで行ってみたら、本当にうちのステーションの2階部分だったんです。すごいのはね、その2階部分にカルテを保管してあったのだけど、それが泥まみれになってはいるけれど、そのまま見つかったんですよ！」

実は齊藤さんは震災前、小規模特養ホームを作る準備をしていた。土地の確保も補助金の申請なども。だが、この災害で保留。

「しかし、僕はやりたいこと、やらなければならぬことがあるんです。応援をお願いします」という。

OK！ 応援するよ！ がんばろう！

齊藤さんを常に気遣い、こまめに連絡をとり、励ますなどという大げさな表現ではなく、冗談交じりの何気ないかわりを続けている仲間の高橋さんの姿にも、ほのぼのとした暖かいものを感じた。